

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 探求が始まる時～シャボン玉～／さいたま市立桜木保育園（埼玉県）

シャボン玉遊びは、多くの園で見られる遊びです。環境の工夫や保育者の関わりによって、子どもたちの体験はより豊かになることが期待できます。

今回は、遊びの中での一人一人の思いを大切にしている園の事例です。一人の子どもの疑問や発見を保育者が受け止め、みんなで共有したことで、子どもたちの興味がさらに深まり、探求が始まり「科学する心」の育ちに繋がりました。



### ● 「いろいろなシャボン玉作ろう」／5歳児

#### ✦ 事例1「身近なものでシャボン玉を作りたい」

- シャボン玉遊びをしていた時、側に落ちていた砂場用のフルイを見つけたAちゃん、「あれでシャボン玉したらどうなるかな？」と保育者に投げかけてきた。
- 保育者が「試してみる？」などと受け止めると、Aちゃんは、急いでフルイを取りに行き、早速試す。
- 「先生、見て！」とAちゃんに言われ見てみると、フルイの上には小さなシャボン玉が連なっていた。Aちゃんは、次にフルイの向きを変えて横から吹いてみる。吹けば吹くほど入道雲のように高くなっていった。
- その後、他の子どもたちもシャベルの持ち手の穴やドーナツ型の砂の型抜きを使って、シャボン玉へのチャレンジが始まった。「これでもできたね！」「次はこれでやってみよう！」とシャボン玉ができた嬉しさで、子どもたちの好奇心は広がっていった。
- シャボン玉液が砂だらけになったことにも気付かないほど、試すこと、チャレンジすることを楽しんでた。遊んだ後、砂だらけのシャボン玉液を見た子どもたちは、遊具を洗いながら、試す・チャレンジする楽しさを友達同士伝え合っていた。
- 翌日、保育室にある遊具でも、シャボン玉が作れるか試すことになった。
- 「できた！」とほとんどの子どもが、自分で選んだ遊具を使つてのシャボン玉作りに成功した。
- 自分の持ってきた遊具で十分試した後は、友達と遊具を交換して試したり、「できない」という子どもにはコツを教えたりする姿が見られた。



### ● 保育者の気付き・思い

- 子どもは結果が分からないことに対しても楽しみながら試していた。
- 小さなことで子どもの発想を大切にしていきたい。
- 危険なこと以外は、実際に試して、経験の中で気付いて身に付けて行ってほしい。

## ✦ 事例2「いろいろな形のシャボン玉を作ってみよう」

子どもたちと保育者が、屋上にある遊具でも保育室にある遊具でもシャボン玉が膨らんだことを喜んでいて…

### ● Nちゃんの疑問

Nちゃん：「遊具はいろいろな形なのに、どうしてシャボン玉は丸ばかりなの？」

「いろいろな形のシャボン玉はできないのかな？」

みんな：「うーん…」

保育者：「シャボン玉をいろいろな形に作れるかな？」

みんな：「作れるよ！」「きつと丸になっちゃうよ！」

保育者：「どんな形のシャボン玉を作ってみよう？」

保育者が尋ねると、子どもたちからは自由な発想で夢のある答えが次々と返ってきた。子どもたちの考えには「自分で作る」ことから、さらに「遊びを面白く、楽しいもの」へ目指す気持ちが表れていた。その考えをもとに、試してみることにした。



### 子どもたちの考え（作りたい形）

ハート、ダイヤモンド、テントウムシ、カブトムシ、花、四角、三角、葉、手裏剣、星 など

### みんなで準備した型の素材

プラスチック製のクッキー型、クリアファイル、紙皿、針金に毛糸を巻いたもの、お弁当箱の蓋など。

### ● 実際に試してみると…

- いろいろな形にシャボン玉が飛んでいくと信じている子ども、今までの経験から丸になってしまうと思っている子ども、どうなるのか半信半疑な子ども、それぞれの思いで道具選びが始まった。「丸になる」と言っていた子どももいろいろな素材や形の型を目の前にすると「どの形にしようかな？」と興味が沸いてきたようだった。
- 実際に試すことでシャボン玉が丸になることを確かめたり、形にならない不思議さを体験したりすることができた。
- 素材や形を変え、あきらめずに頑張る子どもたちだった。



### ● その後…

子どもたちの探求はさらに深まり、「割れないシャボン玉を作る」「人が入っても壊れないシャボン玉を作る」遊びへと展開していった。また子どもたちの思いや取り組みの姿は、保護者にも伝わり、保育に関心や期待感をもってもらうことができた。

### ● 保育者の気付き・思い

- 大人が経験してきた中でできないとは分かっていることでも、子どもたちが不思議だと思ふ気持ちに寄り添った援助をしていきたい。
- 残念に感じている子どももいたが、自分で作って満足するところから、さらに興味が深まった活動であった。子どもたちのシャボン玉への思いが途切れずに繋がって行ってほしい。



## ✦ 今後に向けて

---

- 今まで『科学する心』というと難しく考えてしまい、保育の中でほとんど意識することはなかったように思う。しかし今回の実践を通して、子どもたちが抱く疑問や不思議だと思う姿はすべて「科学する心」に繋がることが分かった。また、「科学する心」は、子どもたちの遊びの中から、たくさん見付けることができることに気付いた。
- 「科学する心」は、みんながもっているものだと思うが、その心の芽を摘み取ってしまわずに育てていくには、やはり子どもの傍にいる大人の存在が重要な役割を果たしていると思う。子どもたちが否定されず受け止めてもらえるという安心した環境の中でこそ、自分の気付きや思いを伸び伸びと表現することができるのだと考える。
- 「なんで?」「どうして?」「やってみよう!」という気持ちを保育者自身ももち続けていくことが大切だと思う。その中で、子どもたちの興味や関心が広がっていくような働きかけや、やりたいことに思う存分取り組める環境作りを心掛け、子どもたちの力を信じ、探究心を見守っていきたい。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」